

# Chocolat 通信



2012 9月号

齋藤茂吉

沈黙の  
われに見よとぞ  
百房の  
黒き葡萄に  
雨ふりそそぐ

K'mio talks

## 「人事を尽くして天命を待つ」

さて、いよいよ本番が近づきました。私はいつも本番には「人事を尽くして天命を待つ」という姿勢で臨んでいます。やる事さえやっしまえば後の事は天に任せるしかありません。しかし「やる事」もやってないようでは天命も何も無い事は言うまでもありません。自信を持って舞台上に上がるためには、自分自身でとことんまでやる、これしかありません。他人は助けてくれません。それによって後悔するも、満足するも皆さん次第。努力をしたもののみが味わえる、「勝利の美酒」。ぜひ打ち上げと一緒に味わおうではありませんか！

(Noboru Kamio)

佐々木 団長の 断腸の思い

## 一夜潰けでもあきらめず

いよいよ本番が目前に迫ってきました。わくわくしますね。まずは無事に本番を迎えられる事に感謝したいと思います。先生を始め団員皆さんの努力の積み重ねによってここに至ることができました。

と言っても本番はこれから、練習が不十分だったり自信が持てない箇所もあるでしょう。あと数日という本場にわずかな時間ですが、集中して自主的な練習をすれば大きく進歩することもありますので一夜潰けなんかと思わずあきらめずに頑張ってみてください。

本番の舞台では、胸を張りお客様に向けて集中と感情を込めて歌いましょう。でも気負い過ぎや力の入れ過ぎは禁物。ありのままのショコラを見て頂きましょう。

(佐々木 晋)

## 10月号の予告とお願い

9月23日は「むしの音コンサート」。そこで10月号は《コンサート特集》をお届けしたいと思います。参加した感想・感動・失敗談...。そして参加出来なかった人も今後のあり方・気付いたこと・提案等々、辛口・甘口・酸口?...、全団員からのご意見をお待ちしています。次号にご期待ください。

## 編集後記 2012.9.20

『心のにこる日本の歌101選』(長田暁二著)には日本の名曲に関する様々なエピソードが紹介されていて、その中に、やなせたかし作詞、いずみたく作曲の『手のひらを太陽に』が載っていた。昭和40年頃やなせさんはテレビやラジオ番組の脚本、舞台美術、詩作など幅広い活躍をされていた。心身共に疲れきって仕事をし、悩み追い込まれていた時に、ふと電球を手のひらに当ててみると真赤な血が見え、自分は生きているんだと再発見、その喜びを謳歌して頑張らなくちゃという思いがおこり、自らを励ますためにこの詞を作ったのだそうだ！(三葉)

9月、出窓の鉄格子にアシナガバチが巣を作った。保健所に相談すると駆除業者に連絡してくれたが、順番待ちとのこと。蜂の巣は珍しいことではないらしい。窓の内側から観察するのが日課になった。直径5、6cmの巣の周りに10匹ほどの枯葉色が蠢いている。こちらが攻撃しない限り人間を襲うことはない、もう飛翔の時季も過ぎた。このまま放っておいても寒くなれば死んでしまうのだが...。巣を発見した隣家の主婦の手前もある。そして業者が来た。蜂の最後を見届けたいと思ったが、作業確認書にサインをしている間に終わってしまった。空しくなった出窓。気がつく朝晩涼気が流れ始めていた。夏のおわり。(Kobo)



わたしの先生



## ゼミの恩師 囲む集い 今も

佐藤 信正(バス)

「教えるとは希望を語ること 学ぶとは誠実を胸にきざむこと」ルイ・アラゴンの詩の一節を引用しながら、私達西洋経済史専攻新3回生12名にゼミナ-ル参加の心得を説かれたのが、恩師尾崎先生との最初の出会いです。テーマは イギリスの封建制から資本主義への移行期。格調高く始まったゼミも、熱心な学問の徒ではなかった私達は、先生に「君達は何を勉強してきたのかね」と慨嘆させる有様だったが、2年間最後まで根気よく指導頂いた。大学紛争の名残でまだ荒廃していたキャンパスで、ゼミ生に開放して下さった先生の研究室と御自宅とが私達のオアシスでした。ゼミのない日でも研究室に行けば誰かが居て、ひとしきり駄弁ってから講義に出席したり、議論に夢中になって講義をさぼり、そのまま先生の御自宅に押しかけて御馳走になるという事を繰り返した実に楽しい青春の日々でした。卒業後実社会の垢に染まったかつての不肖の弟子達は、「先生は学者バカで世間知らずだから」などと生意気なことを口走りながら、何かに託けては先生御夫妻を囲む集いを行っています。持つべきは、まさに暖かい尊敬すべき師です。

7月に入団したアルトの小林有紀子さん、テナーの若林良さん。自己紹介を兼ねて はじめて感動した音楽 ふるさとの好きな食べ物 について 寄稿していただきました。

教えて ショコラ

## はじめて感動した音楽

### ハーモニーの凄みと調和「TAKE 6」

小林有紀子(アルト)

高校生のとき、友達から「TAKE 6」のCDを借りて聴いてみた。「なんだろう、このグループ。声だけでいろんなことできる」今までにない衝撃と感動でした。偶然にもこの原稿依頼のメールが届いたのは、「TAKE 6」ライブ会場でした。今回のビルボードライブも素晴らしかった。でも、ちょっと残念なことがあります。メンバーの一人の方のお声の調子が明らかに悪かった。前回の方が、6人のハーモニーの凄みと調和が感じられたような気がします。

合唱団に入団して数か月。歌上手くなって、合唱の楽しさを感じたい。でも、わからないこと、わからないものだらけ。何をどうすればいいのだろう。水泳やマラソンは、超初心者でも、タイムが速くなったり息継ぎが上手くなったり、練習の成果を実感できる。でも合唱は、今の段階では実感できない。まだまだ、結果を求めるには早すぎるのかも。来年のコンサートには、団員の一人として、自信をもって舞台上に立てるように。今できることを頑張りたいです。

## ふるさとの好きな食べ物

### 「肉じゃがです。」

若林 良(テナー)

それはさておき。先日一ヶ月振りにカップヌードルを食べました。カップヌードルは1971年に日清食品が発売。以降、何度も味に改良を重ね、現在に至る保存食です。日清という名称は、創業者 安藤 百福(あんど うももふく)の言葉、「日々清らかに豊かな味をつくる」からつけられたものだそうです(wikipediaより抜粋)が、それもさておき、時々僕はこのカップヌードルが無性に食べたくなります。「ラーメン」ではなく「カップヌードル」。カップヌードルでしか癒せない渴きに襲われます。何故でしょう。味付けなのでしょう。麺の食感なのでしょう。いえ、僕はそのすべてではないかと思えます。おそらく脳内では、ラーメンとカップヌードルを似ているようでまったくの別物と認識しているのでしょう。そうです。あの味、あの食感、いかにも健康に悪そうな化学調味料!油、カロリー!コレステロール!大好きだ!誰かカップヌードルを持ってまいれー!...ハアハア。...思わず取り乱してしまいました。落ち着いたところでカップヌードル買いにいってきます。ではまた。